LIVE REPORT

Japan Tour 2026

5月26日　渋谷区文化総合センター大和田 さくらホール
取材：石沢功治　photo by Makoto Ebi
取材協力：エグベルト・ジスモンチ来日公演実行委員会

Egberto Gismonti & Daniel Murray

エグベルト・ジスモンチ&ダニエル・ムハイ

圧巻だったジスモンチの希代の音楽性とパフォーマンス

ブラジルの至宝エグベルト・ジスモンチが10年ぶりに来日した！今回は同じくブラジル出身のギタリストのダニエル・ムハイを連れ立って、5月24日が青森県八戸市、東京が26日の渋谷さくらホールと27日のせたがやイーグレットホールの2日間、そして29日が福岡という全4公演に出演、いずれも大反響であった。ここではチケット発売開始早々にソールドアウトとなった渋谷のステージの模様をお伝えするとともに、今回のジスモンチ公演を鑑賞した4人のギタリストのコメントも併せてお届けしたい。

エグベルト・ジスモンチ(g,p,笛)

©Makoto Ebi / @makotoebi.photographs

そもそも今回の来日は、昨年9月に亡くなったエルメート・パスコアールの告別式に日本から駆け付けた、ジスモンチの友人であり日本での代理人でもある方が、ジスモンチとその地で交わした会話がきっかけとなって実現に至ったもの。そのジスモンチが相方に選んだダニエル・ムハイはリオ出身でこれが初来日。ジスモンチは2015年に初めて会った時からダニエルの類い稀なる才能を見抜き、その後ともにライヴ共演をするようになった。2019年にはジスモンチ自らがプロデュースしたダニエルのアルバム『Universo Musical de Egberto Gismonti』を自身のレーベルCarmoから送り出してもいる。

満員に膨れ上がった渋谷さくらホールは、開演前からすでに熱気が漂っていた。そんな中、ジスモンチがステージに現れると歓迎の意が込められた大きな拍手に会場が包まれる。ステージはピアノの独奏で幕を開けた。1曲目はメドレーで、ジスモンチ作の名曲「Infancia」で始り、様々な曲を経て最後は再び「Infancia」で締めくくられる……なんとも粋な展開にオープニングから割れんばかりの拍手だ。以降はアントニオ・カルロス・ジョビ

ンの「Retrato Em Branco E Preto(白と黒のポートレート)」、ピシンギーニャ作のショーロの名曲「Carinhoso」、ヴィラ・ロボス作「Miudinho」などを熟練のタッチで披露。フォルテッシモからピアニシモまで両手から繰り出される一音一音には魂が宿っているかのよう。息を吸うのも忘れて聴き入ってしまった。

続いては、ダニエルが登場してのギター・デュオだ。ダニエルが奏でるのはホセ・ラミレス(Jose Ramirez)のクラシック・ギターで、ジスモンチはマリオ・ジョルジ・パッソス(Mario Jorge Passos)の10弦ナイロン・ギター。まずは軽快な低音リフが基軸となる「Alegrinho」を披露。ジスモンチ主導で行なわれる演奏に対して、ダニエルはそのプレイを聴きながら低音弦でベース的なラインを重ねたり、パーカッシヴなアプローチを加えたりと臨機応変にジスモンチをサポートしていた。続いては娘のビアンカ・ジスモンチ(p,vo)の名前を冠した「Bianca」をプレイ。前曲「Alegrinho」と同様に両者のインタープレイが随所に見受けられ、ジスモンチは左手のハンマリング・オンとともに低音側を打弦したりボディを叩いたりしながら、変幻自在のパフォーマンスで引き込んでいく。その演奏後に添えられた、「我々のような演奏をしないようにね(Don't play like us!)」というジスモンチのユーモア溢れるMCが観客を沸かす。続く「Preludio」などでも、弦をスライド・アップさせたりスクラッチングしたりしながら、スリリングさと緻密なアンサンブルが行き交うパフォーマンスを披露していく。

続くジスモンチ作の「水とワイン」は、ダニエルのソロ・ギターで披露されたのだが、これが実にふくよかで温かみのあるトーン……まるでリヴァーブをエフェクターで掛けたかのような響きがホールに広がっていった。そのダニエルと入れ替わって登場したジスモンチは、チャーリー・ヘイデン(b)の「Silece」をソロ・ピアノでプレイ。美しい楽曲がジスモンチの絶妙な鍵盤タッチでさらに美しく奏でられる、満員の聴衆を忘我の境地へと誘った。

それぞれのソロ・パフォーマンスが披露された中盤を経ての終盤は、再びダニエルが加わってのデュオ。ジスモンチがECMから1988年にリリースした同アルバム・タイトル・チューンの「Danca Dos Escravos」などがギター・デュオで披露された後は、続く最終曲「Frevo」でジスモンチはピアノにシフト。ジスモンチらしさ溢れる両曲で、コンサートのフィナーレを華々しく飾った。

万雷の拍手に応えてのアンコールは、ジスモンチがひとりで登場。ノルウェーの柳笛を吹いてステージを下がり、ホールにはコンサートの終了を示す明かりが灯されたが、拍手は鳴り止まず、再びジスモンチが登場して、ソロ・ピアノで「Palhaco」を含むメドレーを披露。上昇フレイズから成るコードのダイナミックな響きが演奏のフィニッシュを告げると、全オーディエンスから割れんばかりの拍手とスタンディング・オヴェーションが湧きあがった。ジスモンチの希代の音楽性とパフォーマンスが圧巻だったのは言うまでもないが、そのジスモンチを敬愛して止まないダニエルのプレイも印象的なコンサートであった。

ギタリストからのコメント

●鈴木大介／ギタリスト

超絶の音楽的瞬発力と神がかり的な技術とコントロール、そして視界を埋め尽くす一面の蕾が鮮やかに開花する様を、早送りで見ているような豊穣な色彩の乱れ打ち。ジスモンチさんは「音楽は命令するのではなく、提案する」という自身の言葉の通りに、しかしその予想を遥かに超えて、なんと途方もない生命と人間の美しさを私たちに見せつけたのでしょう!!　その世界を共有し見事にサポートしたムハイ氏にも脱帽でした。(渋谷さくらホール＆せたがやイーグレットホール)

●鬼怒無月／ギタリスト

本当に素晴らしいコンサートでした、衰えをまったく感じさせないジスモンチさんの演奏力(ピアノ、ギター共に！)と音楽に向かう熱量は本当に感動的でした。そしてテレパスの会話の様な凄まじいDuo演奏、ムハイさんのソロギターによる「水とワイン」の信じられないような美しい音。本当に沢山のものを頂いた夜でした。(渋谷さくらホール)

●竹中俊二／ギタリスト、サウンドクリエイター、プロデューサー

約10年ぶりに聴いたジスモンチ。その音楽は変わらず繊細でワイルド、そして以前にも増して自由で穏やかな輝きを放っていた。ダニエル・ムハイとのデュオはまるで呼吸を分かち合うような親密さで、美しい音の玉手箱を次々と開いていく。ブラジルの豊かなリズムと洗練されたハーモニーが織りなす世界は、ソロでもデュオでもオーケストラ級のスケール感。アンコールでは、ノルウェーで手に入れた笛を無邪気に吹く巨匠の姿が印象的で、その少年のような笑顔もまた、忘れ難い余韻として心に残った。(渋谷さくらホール)

●関喜弦介／ギタリスト

はじめて生で触れたジスモンチの音楽はこんなにも雄大で美しいものなのかと衝撃を受けました。目の前で彼がピアノやギターを弾く姿はまるで喜びそのもののようで、音楽を通して私たちに様々なことを伝えてくれた気がします。エグベルト・ジスモンチと同じ時代に生きて、彼の音楽を体験できたことを誇りに思います。(青森県八戸公民館＆せたがやイーグレットホール)

■